京都「被爆二世・三世の会」会報

京都市中京区壬生仙念町３０-２
ラボール京都５階
京都原水爆被災者懇談会気付
ＴＥＬ075-811-3203
ＦＡＸ075-811-3213
ＨＰ　http://aogiri2-3.jp

Kyoto Association of 2nd & 3rd Generation *Hibakusha*(Atomic Bomb Survivors)

２０２３年5月１３日(土) ２０２３年度年次総会の後で・・・

２０２３年度年次総会（５月１３日）の報告　２
より知りたい方へ　竹峰誠一郎氏より　４
寄稿　実験と分断の核の時代を止めるために　宮本ゆき　５
新入会員です。よろしく。　伴　沙羽子　７
「国連人権理事会第４回ＵＰＲ勧告」についての外務省要請への賛同について　１０
会員から会員へ@みなさんからのお便り紹介　１３
本・ＤＶＤ・映画・番組の紹介と交流　１４
「武器としての国際人権―日本の貧困・報道・差別」
SCRAPBOOK／「京都も原爆投下の候補だった・・・」（京都）　１５
編集後記　１５
２０２３年６月の行事カレンダー　１６

2023年度年次総会(5月13日)の報告

■京都「被爆二世・三世の会」の２０２３年度年次総会は、５月１３日（土)、会場のラボール京都会議室とオンライン（ＺＯＯＭ）を結んで開催しました。参加者は会議室出席が２７人、ＺＯＯＭ出席が４５人、合わせて７２人（非会員含む）でした。

前半は総会議案（２０２２年度の活動のまとめと２０２３年度方針、決算と予算、世話人選出）の提案と審議を行い、全議案を承認しました。

後半は竹峰誠一郎明星大学教授による記念講演です。講演９０分、質疑応答３０分、あわせて２時間の時間がしっかりと学ぶ機会となりました。

■記念講演『マーシャル諸島　終わりなき核被害を生きる』

記念講演のタイトルは『マーシャル諸島　終わりなき核被害を生きる～世代を超えた影響も見据えて』でした。

戦後、マーシャル諸島で行ったアメリカの核実験は１００回以上にも及びます。我々はややもするとその被害を、第五福竜丸に代表される太平洋のマグロ漁業関係者だけに向けがちですが、実際は、マーシャル諸島の現地に住む人々こそ、直接的で深刻な被害を被っています。当然と言えば当然のことです。被害者は、今でいえばマーシャル諸島の国民といってもいいかと思います。その歴史と、今に続く被害の実態について詳しく語られることになりました。

詳細は後日講演録にまとめて、本会報にも掲載することにいたします。ここでは講演の概要だけを紹介します。

１．「被爆者」という言葉はどこから、いつから。被爆二世とは・・・・

冒頭、私たちが日頃から何気なく使っている「被爆者」という言葉。それは
どこから、いつから生まれたのか、という問いかけから講演は始まりました。１６５７年に原爆医療法が定められ、法の援護の対象となる人々を特定する頃から「被爆者」という言葉が使われ始めています。その過程では、広島・長崎の原爆被害者以外の核被害者（例えばビキニ水爆実験被害者など）を排除する思惑も働いていたのではないかと・・・・。

「被爆二世」について語る時も、何をもって「被爆二世」とするのか、二世への影響とは健康問題だけなのか、といったことも考えていく必要性が述べられました。

２．広島・長崎への原爆投下からマーシャル諸島核実験へ・・・なぜマーシャル諸島だったのか❓

マーシャル諸島での核実験は１９４６年から１９５４年まで１００回以上に及びます。なぜアメリカから遠く離れた中部太平洋のマーシャル諸島が核実験地として選ばれたのか。アメリカの非人間的な世界戦略、軍事政策とともにその歴史が説明されていきました。

３．核実験の「その後」生きてきた軌跡を追って

核実験後のアメリカ政府機関による追跡調査の実態、住民側の抵抗と政府を動かした実績も紹介されました。

４．終わりなき核被害

今も続く被害の実相が語られました。それは健康被害だけでなく、島々への再居住の問題、文化・暮らし・心への被害の広がりの問題、核廃棄物格納施設「ルニットドーム」計画のような新たな脅威の問題、引き続く米軍駐留問題、環境汚染等々、本当に多岐にわたります。日本の核被や、被爆二世・三世の問題を考える上でも、マーシャル諸島の“終わりなき核被害”は充分に参考にして考

慮すべではないかという問題提起でした。

核による被害者は言うまでもなく広島・長崎の被爆者だけではありません。世界中に、核実験による被害者がいます。原料から核兵器を生産していく過程での被ばく者も。原発の運転と、原発事故による被害者もいます。その実態がある程度明らかにされてきた被害者もありますが、多くは隠蔽され、闇に閉ざされてきたままになっています。私たちは微力ではあっても、世界の核被害の一つひとつを明らかにしていく、こじ開けていく努力を続けていきたいと思います。今回の記念講演もその重要なステップの一つです。

記念講演を聞いての感想から

●マーシャル諸島での核実験は何度も繰り返されているために、ずっと核の被害が続いていることに初めて気付きました。福島での被曝と同じことだと思います。特にマーシャルの人々が人間として扱われていないことに怒りを感じます。これは広島・長崎と同じで、人体実験として扱われたのだなと思いました。
すべての被爆者、核実験被害者とつながることが大事だと思います。「グローバル・ヒバクシャ」ありがとうございました。

●「被爆」「被爆者」「唯一の被爆国」などの表現があります。日本では広島、長崎で完結しているのだなと思いました。
福島原発の被爆者（原発で働いている人）に対しては、被爆者手帳を発行したという話は聞いたことがありません。今日の話の最初の部分（被爆者援護法の関連の話題）でいえば、福島の人たちは対象になるのではないかと思います。

●きれいな海の写真を見せていただきましたが、福島も自然が豊かでとてもきれいです。事故前と変わらずきれいに見えますが、モニタリングポストを見ると汚染されているのだとがっかりします。
土地は先祖代々受け継いでいくものだとの考えも私たちと同じだと思いました。
先生の本を読んで勉強したいと思います。

●「グローバルヒバクシャ」として、日本、マーシャルをつなぐ核の被害を受けた人々の状況がよく分かりました。

●竹峰先生の講演、本を読んでいたのでよく理解できました。核実験は力の強いものが弱いものに強いる構造であること、マーシャルの人々の苦悩と闘い、グローバルヒバクシャの概念、そして何よりマーシャルの人々に寄り添う真摯な先生の姿勢を通して多くを学ぶことが出来ました。
この講演を開催して頂きありがとうございました。

より知りたい方へ

竹峰誠一郎氏より

先日は講演の機会を与えていただきありがとうございます。拙著を丁寧に読んでいただき、鋭い質問も寄せてい ただきありがとうございます。新たな視点が得られたとの声をいただき、よかったです。以下、関心を持った方が、 より学びを深めるうえで参考になる情報をまとめました。

イベント紹介 6/3 オンライン国際シンポジウム：東京電力福島原発汚染処理水の海洋放出 太平洋マリアナ諸島 の人びとの声を聴く(要申込)

今回は触れられませんでしたが、ご関心ある方がいるだろうということで紹介させていただきます。
https://www.jalisa.info/events1/kokusaishinpojumutokyodenryokufukushimagenpatsuosenshorisuinokaiyohoshutsu-taiheiyomarianashotonohitobitonokoewokiku
申込先 https://forms.gle/keCwAwNKRNBZETpp8

マーシャル諸島核問題員会教育普及担当 Evelyn Ralpho jeadrik(エヴェレン レレボウ＝ジェアリック)氏の講演記録

2023 年 5 月 2 日午後、広島で行われていたものです。前半は竹峰が概説しています。講演は 18 分あたりから 始まります。現地の方の話を聞くと、より理解は深まると思います。
https://vimeo.com/823338861?share=copy
Password: evelyn88
＊動画は皆様の団体で活用したり、皆さんの団体の関係者が個人で利用したりするために提供するものです。不 特定多数への拡散やネットや SNS 上での掲載はやめてください。

わたしの著作の紹介

★本『マーシャル諸島 終わりなく核被害を生きる』新泉社、2015 年
→講演では 1 章、5 章の内容を主に話しました。序章でグローバルヒバクシャについても説明しています。
★新刊本 「重層化する核被害のなかで――マーシャル諸島発『核の正義』を求めて」(藤川賢・友澤悠季編『なぜ公害は続くのか 潜在・散財・長期化する被害』新泉社、7 章、2023 年３月
→公害問題としてマーシャル諸島の核実験問題を論じています。日本の植民地支配などの歴史とともに、核廃棄 物のことにもふれています。
★これから出る本 「オセアニアから見つめる「冷戦」――「核の海」太平洋に抗う人たち」『岩波講座世界歴史 第 22 巻――冷戦と脱植民地化Ⅰ』岩波書店、2023 年 7 月末刊行予定
→冷戦という時代をマーシャル諸島など太平洋の島々から問い直す論稿です。講義では話せませんでしたが、マ ーシャル諸島で核実験当時から反対する運動があったことや、太平洋の非核独立運動についても詳しく紹介して います。

HP「ヒロシマ平和メディアセンター」

中国新聞社が運営しているサイトです。右上に「検索」があります。マーシャル諸島や核実験などと入力すると、 関連する記事が出てきます。他にも被爆地広島で報道されたことが蓄積されているサイトですので、活動に関係す るいろいろな事柄が調べられるかと思います。
https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?lang=ja
連載「マーシャル諸島に学ぶ」(竹峰誠一郎)
https://www.hiroshimapeacemedia.jp/blog/?lang=ja&s=マーシャル諸島に学ぶ&submit=
中国新聞社連載「世界のヒバクシャ」 https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?post_type=exposure

そのほか何かあれば、竹峰誠一郎（seiichiro.takemine@meisei-u.ac.jp）まで連絡ください

寄稿

実験と分断の核の時代を止めるために

～　『黙殺された被曝者の声』日本語訳版発行に際して　～

宮本ゆき　（シカゴ）

私の母は６２歳で亡くなりました。母の被爆手帳によると、広島の爆心地から北に１．６キロの白島にあった実家で被ばくしたことになっています。しかし、本当は爆心地からもっと近い１．２キロ、２００人余りの児童が亡くなった白島小学校にいたのではないかと被服支廠で被ばくした伯母が母の死後教えてくれました。

母方の祖父は病院の夜勤明けの帰り道原爆にあい、外傷は無かったものの急性放射能障害で２週間後に亡くなったと聞いています。母方の祖母は白島の自宅で被ばくし、のちに肺がんで亡くなりました。被ばく二世である私の従姉妹は２０代の時、見ず知らずの男性から「普通に結婚できると思うなよ」と暴言を吐かれました。その後、彼女は伴侶と二人の子供に恵まれるのですが、３０代で自己免疫疾患に罹り、５０代で亡くなりました。周りは、家族の誰かしらが被ばく者で、被ばく二世の多い環境でもあり、私も長生き出来ないのだろうな、と何となく思っていたいので、５０歳になった時は、こんなに長生きできた、というありがたい気持ちでした。

母は被ばく体験を語らなかったので、というよりも、私が積極的に聞かなかったので、若い頃のことは分かりません。私が物心ついてからの母は３０代でメニエール病を患い、４０代で増血器官に異常が出て２週間に一度増血剤を打ち、５０代で癌になったことしか知りません。もう２０年前に亡くなった母ですが、未だに写真を見るのは辛く、それは、被ばくによって母と母に繋がる人たちが被った苦しみと失ったものとを思っての怒りと、やりきれない悲しさのためです。こうした思いは「京都被ばく二世・三世」の方々と共通するのではないでしょうか。

２０１１年の福島の原発災害後、そして２０２０年に友人でもありハンフォード被ばく者裁判の原告でもあったトリシャ・プリティキンの本を読んだ際にも、同じような怒りと悲しみを再体験しました。

この本は２４人の原告の証言と、裁判に至る顛末とその結果からなっています。ハンフォードの被害は、その稼働時、広島・長崎の原爆攻撃以前の１９４４年末から始まっていました。ハンフォードは、マンハッタン計画の三大拠点地―ニューメキシコ州のロス・アラモス、テネシー州のオークリッジ―の一つで、長崎原爆のプルトニウムが製造され、その後の冷戦で「国防の要」と考えられた核兵器製造のため、プルトニウムを製造し続け、そのための電力としての原子炉も抱えていました。（今でも同州の大都市シアトルに電力を送っています）。

この本での私にとっての大きな気づきは２つ

です。１つ目は「核の時代」は壮大な実験の時代であった、ということ。そして２つ目は「核の時代」は分断を作り続ける、ということです。

まず一つ目ですが、ワシントン州東部のハンフォード建設において先住民の土地を奪い、白人農家の土地を安く買い叩きましたが、当時すでに事故などを起こした際の放射性降下物の懸念はあったのです。つまり、土地を奪っただけでなく、そこに住む先住民の人たち、農家の人たちの健康を害する懸念は十分考えられていました。その上、アメリカ政府は積極的にハンフォード近隣への移植を進め、第二次世界大戦の退役軍人を中心に土地を安く割譲しました。この中には多くのモルモン教徒が含まれていました。モルモン教徒は今でこそ、大統領候補を出すほど認められてきましたが、当時は迫害も多くありました。ネバダ核実験場からの放射性降下物の通り道であったユタ州も、モルモン教徒が多く移住していた場所でした。本の中で証言者の一人は、モルモン教徒はその教義により飲酒や喫煙をしないために、格好の実験材料だったに違いないと言っています。

ハンフォードの実験として一番知られているのは、１９４９年１２月のグリーン・ラン実験でしょう。これは、当時のソ連がどれだけ原爆を作っているか調べるため、ソ連と同じように、約９０日冷却していた使用済み核燃料を１６日で大気中に排出する、という実験でした。冷却時間が短いため、放射性物質の濃度は高くなるのですが、原爆開発を急いでいたソ連が行っていたため、同じ濃度の放射性廃棄物を出してその量を測ることで、ソ連の原爆開発の内情が推測できる、と考えられたのでした。つまり、通常より「若い」（グリーン）廃棄物を出すため、グリーン・ランと呼ばれました。これは、ワシントン州東部、そして州を超えて多くのホットスポットを作りました。

その後も放射性廃棄物は排出されていましたが、住民は「安全だ」としか言われておらず、政府は自分たちを守ってくれると思っていたのでした。そして、１９４４年以来放射線に曝されてきた人々は、癌などの重篤な病気に罹ったり、体の不調に悩みつつも原因が分からないまま４０年以上が経ちました。ようやく１９８６年にエネルギー省が、世間のプレッシャーから情報公開に踏み切り、ハンフォード近郊の人たちは自分たちの健康被害の原因を知ることとなったのです。

こうした事実は「核の時代」において「国が自国民を守る」という言説が虚像であることを如実に表しているだけでなく、その言説の上に成り立っている核抑止論をも無効にするものです。だからこそ、彼らの声は黙殺されてきたのです。そして、婉曲的に「国」というカテゴリーにも疑問符を突きつけます。原爆が往々にして（特にアメリカでは）「アメリカ対日本」という国の枠組みで語られることで、広島・長崎にいた多くの人たちが不可視にされ、同時に欧米の植民地支配（長崎で被ばくした「オランダ兵士」はインドネシア人を含んでいたこと）も日本の植民地支配も不問にされてしまうように、国の枠組みにおいて、ネバダ核実験場やハンフォードの被ばく者が不可視にされている上、国として曖昧な立場に置かれている「テリトリー」（かつてのマーシャル諸島、現在の北マリアナ諸島など）における被害も、アメリカでは国民の共通の意識とはなっていません。

しかし、これを逆手にとって国の枠組みを超えて被ばく者同士が連帯できないものでしょうか。これが２つ目の気づきに繋がります。実は１９８６年のマーシャル諸島島民への補償法が、アメリカ議会でＲＥＣＡと呼ばれる「被曝補償法」（１９９０年）やＥＥÖＩＣＰＡと呼ばれる「核産業作業員職業病補償法」（２０００年：日本語訳宮本）に繋がっていきます。ここでいう核産業には原発も入りますが、こうした補償法においても分断が作られています。例えばＲＥＣＡでは、ニュー・メキシコ州のウラン鉱山夫には、働いた年月にもよるとはいえ受給資格がありますが、同州で世界初の原爆実験であったトリニティ、またはその後のネバダ核実験からの風下被ばく者として、ニュー・メキシコの一般市民には受給資格がありません。また、ハンフォードなどの核施設で働いていた作業員には受給資格がありますが、トリシャの本に出てくるように、ハンフォード風下にいた一

般市民には受給資格がありません。そして、この異なる対応を支えている理念は、核抑止論に他ならないのです。つまり、アメリカの核産業で国の防衛に貢献した、と考えられる者には補償する、という考え方です。核産業で市民を傷つけ、それを防衛という名で美化し、分断が作り続けられていくのです。

怒りと悲しみを越え、差別に深く繋がっている実験や分断をはっきりと見せてくれるのがトリシャ・プリティキンの『黙殺された被曝者の声』だと思っています。そして、こうした問題がアメリカのみの問題ではなく、日本でも起こっていることだということも。福島の「イノベーション・コースト構想」がハンフォードをモデルにしていることを考えると、実験や分断が現在も繰り返されていることに対し、この訳書が一石を投じられたらと考えずにはいられません。

新入会会員です。よろしくお願いします。

「おばあちゃんとおじいちゃんの戦争体験」とともに

伴　沙羽子さん（神戸市）

皆様、初めまして。伴 沙羽子と申します。

今年の４月から新生活が始まり､慣れないことだらけの毎日ですが、多くの方々に助けていただきながら過ごしております。上海に留学経験があり、現地の人々や語学学校のクラスメイト達と交流することができました。

母方の祖母が救護被爆者なので、私は３世に該当します。祖母は看護師として広島に行ったのですが、当時の体験について私は中学生の時にインタビューしました。祖母はこの春に他界し、証言を届けられるのは私しかいなくなったので、これを機に持ち寄らせていただました。

母方の祖父の戦争体験についてもインタビューしたので、併せて共有させていただきました。祖父は朝鮮半島に抑留されていたこともあり、母方の実家には当時の書簡が残されています。

「当時の状況についてどれくらい詳しく聞けたかな・・・でもあまりにも辛い記憶だから、本人が証言できる範囲内で話してくれたのかな」「おじいちゃんやそのお兄さんは帰ってくることができて、次世代に命をつないでくれた。でも、爆撃された潜水艦に乗っていた人達は・・・」「『敵』ってみなされてしまった側だって同じ人間なのに、お互いに傷ついて傷つけ合わされて・・・そもそも日本が侵略・攻撃する側だったから、加害の歴史から目を背けちゃいけないな」「『おじいちゃんの今(インタビュー当時)の気持ち』の内容、どうしようかな・・・アイヌや在日コリアンの方々、他にも外国につながりを持つ人達と一緒に、私達は日本で生活しているから」「真の平和や多文化共生社会の実現のために、ようやく私も一歩踏み出せたのかな・・・まだまだできることってありそうだな、どうしたらいいかな」・・・祖母および祖父の証言を文字起こししながら、以上のように再考しておりました。

小学校での修学旅行や高校生の時の家族旅行で、広島の平和資料館も訪れました。小学校では事前学習として、「はだしのゲン」のアニメ映画を視聴しました。

以上のような経験および活動を通して、私は「戦争も核も絶対にダメだ」という意識を持ち続けて生きてこられたのだと思います。今回は家族の誰にも言わずに、私自身の意思表示として入会させていただきました。今後もますますご縁をつなげることができれば、大変幸いに存じます。

どうぞよろしくお願いいたします。

以下、ほぼ原文ママ(漢字変換等、一部修正あり):でおじいちゃん・おばあちゃんの戦争体験談(2006.8.15)を紹介させていただきます。

Ⅰ、おばあちゃんの戦争体験:

①話してくれた人、大西里(インタビュー当時は８２才)、私の母の母。

当時は天王寺の大阪鉄道病院の看護師。２０、２１才の時。

②体験談:

８月６日・９日、広島・長崎に新型爆弾が落とされ大変な被害に遭った。そこで救護班として行った。８月９日または１０日、広島に第一班で医師一人と看護師５人。

トランクにローソク・ガーゼ・タンニン酸を積めた。夜、大阪駅を出て、次の朝、広島駅に着いた。列車の中は兵隊さんがたくさん座席に座っていて、おばあちゃん達はしかたなく通路に座り込んでいた。どこかの駅でいきなり兵隊さんが降りたので、靴で踏まれ、とても痛かった。

広島県福山駅で、空襲に遭った。汽車は電気を全部消していたが、焼夷弾の炎で真っ赤になった町がよく見えたそうだ。

旧広島駅のホームに降り立つと、病院は全てやられ、煙突とホーム以外の建物は全くといっていいほどなかった。後ろの比治山が焼けただれて真っ赤になっていた(熱で山の葉っぱが枯れ、それが真っ赤に見えた)。あちらこちらにガラスの破片が散らばっていて座る場所がなかった。前の方は建物がなくて煙突だけが立っていた。

鉄道工場のあった芸備線矢賀駅へ行った(北東に１駅)。民家の屋根は全て柔らかいお餅を上から手でつまみ上げたような形になっていた。窓ガラスがあられのようにきれいに割れて飛び散っていた。

工場はもう使えなかったので、近くの小学校で救護をしようということになり、場所を移した。まず飛び散ったガラスを掃除して、机を寄せて、場所を確保した。たくさんの人が担架で運ばれてきた。その多くの人が来た途端安心したのか死んでしまう。全身やけどを負った人、身体の皮がめくれてる人。まともな治療はできなく、唯一行った治療法は、持ってきたタンニン酸を水で薄め、ガーゼで貼り付けるというものだった。

特に忘れられなかったのは、１人の若い女性が、「私よりあの子を助けて、主人は戦場に行ってるから・・・」彼女も全身に大やけどを負い、寝かされていた。教卓の上に乳児が寝かされていた。抱き上げると背中の皮が人の形にきれいにむけてしまった。「こんなやけど初めて見た」と思った。おばあちゃんは若い女性に「もうこの子は死んでいる」とは言えなかった。名前、性別もわからなかった。たぶんその女性もなくなったのだろう。

いつの間にか夜になっていた。持ってきたローソクに火を灯して治療をした。朝はカンパンを少しだけ、昼は何も食べられなかったので、村の人が持ってきてくれたおにぎり(大豆や粟入り)がとてもおいしかった。お風呂がなかったので、近くの川で行水した。ドブのようにドロドロの水だった。川のほとりで死体を焼いていた(まだ戦争中だったので昼間は焼けなかった)。周りに死体がある１畳ほどの隙間で寝ていた。泣く人や死体があったが、疲れていたのかよく眠った。

次の朝、近くの瓜をもらって生で食べた。とてもおいしかった。そのため、帰る時にその瓜を分けてもらった。「こんなおいしいの食べたことないから、大阪のみんなにも食べさせてあげよう」そして大阪に帰り、トランクを開けたら、ダメになってしまっていた。８月１３日、第一班は大阪に引き上げた。

８月１４日、京橋の大砲工場(当時の砲兵工廠)を目がけて大空襲があり、天王寺も爆撃に遭った。まるで大地震のようだった。「もうここで死ぬんかな」と友達と話していた。空襲が来ると、患者さんを地下に運ぶのだが、患者さんは「もう動きたくない」と言った。この京橋事件はあまり知られていないそうだ。

そして８月１５日、終戦。病院で知った。「よかった、でももう一日早かったらあんな怖い目には遭わなかったはず。たくさんの人も死ななかったはず」と思った。

８月１６日、京橋に救護班(４～５人)として向かう。救出している人の救護に当たる。電車に乗っていた人はあの京橋事件で全員死んだそうだ。がれきの間に学生が挟まっていた。水を飲ませながら助けようとするが、なかなか救出できなかった。「がんばれ」と声をかけて救出しようとするが、みるみるうちに顔色が変わってしまった。道を歩いていると、首だけ出ている人が何人もいて、すごい顔の色をしていた。線路の枕木を積み上げて死体を焼いた。その時初めて「死体ってこうやって焼くんやな」と思った。

そうしているうちに安治川に米軍が上陸するというデマが入り、女子はすぐに引き上げろと命令された。淀川の鉄橋を歩いて渡った。線路が林のように突き立っていたが、枕木はそのまま残っていたので、それを踏んで渡った。でも、枕木の間が開いていたので怖かったが、一目散に渡った。そして天王寺の病院へ帰り、嬉しいとは思わなかったが、帰ってほっとした。

その後、寄宿舎が焼け出され、白い看護服のままだったので、鉄道の男子の制服(ツメエリ)を着て外出したりした。そして一般の人と同じように食糧難に遭い、パンを作ってもらうためにドングリを拾いに行った。他にも雑炊や畑のサツマイモの茎を食べた。そして日本国憲法が発布され、「戦争放棄はありがたいな」と思った。

③おばあちゃんの今(インタビュー当時)の気持ち:

戦争は恐ろしいもの、惨めなもの、平和であるよう祈ります。今はありがたいけど、世界の内戦を見ていると、戦争は絶対イヤ。

④私(インタビュー当時)の感想:

初めて聞いてビックリした。原爆は自分にとって身近な出来事だったんだなと思った。あまり知られていない京橋事件、私が伝えていこうと思った。そして、おばあちゃんと共に平和の大切さを感じた。

Ⅱ、おじいちゃんの戦争体験談:

①話してくれた人、大西昭三(インタビュー当時は７８才)、私の母の父。

当時は広島県庄原市出身の１５、１６才の兵隊。人間魚雷「回天」の乗組員。

②体験談:

最初は別の部隊に入隊したが、戦友と一緒に「みんなで行ってみんなで死のう」ということで「回天」の乗組員に志願した。当時はそのような戦い方が格好いいと言われていた。

そして８月６日、下関行きの汽車に乗って、原爆が落ちる約二時間前の広島の駅を通過し、山口県の柳井市へ行った。柳井には「回天」の基地があった。そしてそこで「広島に新型爆弾が落ちた」と聞いた。

しかし、特攻隊の乗る予定だった「回天」を乗せた潜水艦が爆撃され、一時中止になった。そのまま待機していると、８月１５日に終戦になり、結局は「回天」に乗らずに済んだ。「出撃しなくていい、特攻隊で行かなくていい、助かった」と思った。

終戦後、すぐ家に帰った。お母さんは病気で亡くなっていた。家にはお父さんだけがいた。兄弟はみんな兵隊になり、そのうちお兄さんも特攻隊だったが、出撃する前に終戦になったので帰ってきた。生きて会えて嬉しかった。

③おじいちゃんの今(インタビュー当時)の気持ち:

もう戦争なんてイヤだ。日本は大和民族。みんな心が合う。国の中で内乱は起こらない。

④私(インタビュー当時)の感想:

もしあの時おじいちゃんが「回天」に乗っていたら、自分は生まれていなかったんだと思い、改めて生きることのありがたさを感じた。

また、「回天」に乗ろうとした時のおじいちゃんの歳は１５、１６才だと聞いて、私の中学校の先輩ぐらいの歳だということにビックリした。

「国連人権理事会第4回UPR勧告について」外務省への要請を京都「被爆二世・三世の会」として賛同について

守田敏也（左京区）

私は「国連避難民の人権に関する国連特別報告者による訪日調査を実現する会」に参加し、副代表を務めています。

この会で国連の場でなされたＵＰＲ勧告に対しての、日本政府によるフォローアップ受け入れを外務省に要請しました。これへの団体賛同を求めていて、京都「被爆二世・三世の会」でもお願いします。

国連人権理事会では、各国が約４年半のサイクルで自国の人権状況について審査を受けます。これをＵＰＲ（普遍的・定期的レビュー）制度といいます。

２０２３年1月３１日、第４回日本審査が行われ、福島原発事故による人権問題については、１０ヵ国から１６の勧告が出され、原発事故から１２年が過ぎても問題が続いていることが国際社会で公になりました。

今年６月から７月にかけて国連欧州本部（スイス・ジュネーブ）で開かれる人権理事会第 53 会期で、日本政府はそれらの勧告に対する回答を表明します。そこで、実現する会は、４月１１日、外務省に対して第４回ＵＰＲ日本審査で示された勧告をフォローアップすることを受け入れるよう要望書を提出しました。この要望書への賛同を募っているのでお願いします。

詳しくは「要望書」およびこれに関するプレスリリースをご覧下さい。

またこの人権理事会第５３会期に福島の避難者が参加するためのカンパを会として求めています。私はこれに同行することになっていて、取材し現地からＬＩＶＥ配信なども試みるつもりです。それで私個人もカンパを集めています。この点もよろしくお願いします。

２０２３年5月２４日の例会で、京都「被爆二世・三世の会」として賛同することを確認しました。

令和５（２０２３）年4月１１日

外務大臣 林 芳正 殿

要望団体 別紙記載のとおり

要望書

（国連人権理事会第４回ＵＰＲ勧告について）

第１ 要望の趣旨

別紙第４回ＵＰＲ勧告を日本政府としてフォローアップすることに同意する旨の表明をして下さい。

第２ 要望の理由

１ 要望団体について

本要望書を提出する団体は，いずれも，国連人権理事会の枠組みの中で、日本政府が、国際社会からの指摘を受け、国際人権法に基づき、日本国内における人権状況の改善を図ることを求めています。

２ 第４回ＵＰＲ勧告

令和５（２０２３）年１月、国連人権理事会は，ＵＰＲ第４回日本政府報告を審査し、各国が、

日本政府に対して、勧告を行いました。

そのうち、福島第一原子力発電所の事故に関連する勧告は、次のとおり１０カ国からなされています（詳細は別紙。（以下「第４回ＵＰＲ勧告」といいます。）。

1. 東ティモール 汚染
2. バヌアツ 汚染水 IDPs 支援
3. オーストリア 前回の UPR に引き続き福島被害者支援
4. 中国 汚染水
5. コスタリカ 福島事故に関する教育
6. フィジー 汚染水
7. マーシャル諸島 汚染水と人権
8. パナマ 被害者の子どもの癌を含む健康に関する医療の無料支援
9. サモア IDPs 汚染水
10. チャド 福島原発事故女性の自立支援

４ 第４回ＵＰＲ勧告の意義

⑴ 原発事故避難者関連

オーストリアは、福島原発事故による避難者を国内避難民として認めること、住居、健康、生活、子どもの教育に関する人権を守ることを保障することを勧告しました。

オーストリアは、第３回ＵＰＲ勧告でも、同様の勧告をしており、結局、 日本政府の対応が国際社会からみて不十分であること、少なくとも、まだ 改善するべき余地が大きいことを意味しています。

オーストリアの勧告は、国際人権法として認められている健康に対する 権利という観点からなされているものと理解出来ます。

したがって、上記勧告は、引き続きフォローアップされることが一貫性 のある誠意ある対応と考えられます。

⑵ 放射性廃水の放出問題について

放射性廃水を海洋に放出する問題について、６つの国から合計１０個の勧告が出されています。

「太平洋諸島フォーラムの独立した評価による許容判断がされない限り、放出計画を停止すること（マーシャル諸島）」など、日本だけで安全性を 判断することへの懸念が各国から強く訴えられています。放出に代わる代 替案を求めている国もあります。

太平洋の国々が度重なる核実験で深刻な被害を受けてきたこと、また事故を起こした福島原発から数年にわたって高濃度の放射性廃水が海にそのまま漏出し、その後も遮蔽壁などの設置にかなりの年数がかかったことなどから、さらなる海洋投棄に対して不安が高まるのは当然です。

ぜひ、この声に耳を傾け、これまで海洋に流出した汚染水及び今後、放出が予想される放射性廃水について、その全データを開示し、その上で対話的な姿勢をつらぬいて勧告をフォローアップして下さい。

なお、日本政府は、「処理水」と呼称していますが、多くの関係する各国政府は、「放射性廃水」と表現しており、日本政府の認識が国際社会の それと乖離していることについても、謙虚に受け止めた上での対話が求め られていることを付言します。

５ 小括

私たちは，上記にご説明した事情に基づいて，外務大臣に対し，日本政府としてすみやかに、要望の趣旨に記載したとおりの対応を行うことを求める ものです。

以上

【本件に関する連絡先】
〒604-0804 京都市中京区堺町通竹屋町下ル絹屋町１２０番地 弁護士 田辺保雄
tel 075-211-5631 fax 075-211-5633 yasuo.tanabe@nifty.ne.jp

（別紙）
第４回 国連人権理事会普遍的定期的審査（UPR）日本勧告
（A/HRC/WG.6/42/L.12 2023 年２月 10 版）

158.135 国際社会の合法的で正当な懸念を真摯に受け止め、オープ ンで透明性のある安全な方法で核の汚染水を処理すること（中国）
158.141 クリーン、健康、且つ持続可能な環境のための人権を、憲法および法律レベルで取り入れ、自然災害、及びその他の災害による被害者への核放射線の影響に取り組むこと（コスタリカ）
158.148 人体の健康に害を及ぼすこと、及び環境への悪影響を最小限に留める核廃棄物の放出代替え法や貯蔵方法の研究、投資、活用を強化すること（サモア）
158.171 特に海洋法に関する国際連合条約など、福島第一の放出計 画に関する包括的な環境影響評価を含む国際的な義務を十分に遵守すること（サモア）
158.172 太平洋諸島フォーラムの独立した評価による許容判断がされない限り、太平洋に放射性廃水の放出計画を停止すること（マー シャル諸島）
158.173 太平洋への放射性廃水の放出計画を停止し、現在進行中の放出案に関する独立的な評価について、太平洋諸島フォーラムとの 対話を継続すること（フィジー）
158.174 放射性廃水の太平洋への放出が許容できる措置であるかどうか検証し評価を進めるため、太平洋諸島フォーラムの独立した科学の専門家が要求する全データの完全開示を提供すること（フィジ ー）
158.175 福島第一原子炉からの放射性廃水の投棄に関するいかなる決定も、適切な国際的協議が行われるまで延期を検討すること（東 ティモール）
158.176 情報格差を含めた太平洋諸国の全ての懸念に対処するまで、太平洋への放射性廃水の放出を控えること、人間や海洋生物に与える放出による影響について検証可能な科学的データを利用可能にすること（サモア）
158.177 あらゆる核の汚染廃水放出の安全性について、さらに納得のいく科学的証拠を提供せずに、福島原子力発電所からいかなる核 汚染廃水及び廃棄物を太平洋に放出投棄しないこと（バヌアツ）
158.178 福島第一原子力発電所の事故による子どものがん増加を含む健康影響を評価し、特に女性と子どもなど、被ばくした全ての人に無料で定期的な総合医療を提供すること（パナマ）
158.179 放射性廃棄物による被害から太平洋の人々と生態系を守るため、放出計画に代わる案を進展させ実施すること（マーシャル諸 島）
158.180 福島第一原子力発電所の事故によって影響を受けたすべての避難者の支援を引き続き尽力すること（サモア）
158.217 原発事故に影響を受けた女性の経済的自立を達成する手助けのための進展と支援に取り組むこと（チャド）
158.299 福島原発事故による避難者を国内避難民として認めること、住居、健康、生活、子どもの教育に関する人権を守ることを保障すること（オーストリア）
158.300 福島原発周辺に人々が帰還する前に、威圧的な行為や経済的 な脅迫なく、国内避難民の安全、健康、権利に関するさらなる科学的証拠の提供に取りかかること（バヌアツ）

会員から会員へ ✿ みなさんからのお便り紹介

他地域の２世・３世の方からいただいたお便りも紹介いたします。

■滝本健さんのご冥福を

谷口公洋（城陽市）

謹んで、滝本健様のご冥福をお祈り申し上げます

滝本さんは立派な方でした。亡くなられて本当に残念です。以前に滝本さんとメールのやりとりをした時に、滝本さんの善意のご意見を、歪んで理解して批判したことがあります。しかし別件で滝本さんの誠実さを知ることになり、言葉が過ぎましたと謝りました。その際にも滝本さんは暖かく受け止められ、丁寧な対応をしていただきました。何かの折にお会いできれば、一言でもお話ししたいと思っ
ていました。私は多忙であったため、その機会がなく亡くなられたことも他の人からお聞きしました。残念です。

繰り返しになりますが、ご冥福をお祈り申し上げます。

■親孝行してきます

谷口公洋（城陽市）

５月２４日（水）から２６日（金）まで、郷里の鹿児島へ帰ってきます。この間、母親の認知症が進み、大分と忘れるようになりました。先月からあれほど嫌がっていたデイサービスに、週に４日間お世話になっています。私は医師にも会っていないし、施設も見てないので、見学予定です。

また時間が許せば、例会にも出席します。

■広島で被爆死した南方特別留学生２人のテレビ番組を見た。

米重節男（向日市）

今日（５月９日）の朝９時前、ＮＨＫ-ＢＳ１でワールドニュースの中で放映がありました。南方特別留学生で被爆死した２人、ニック・ユソフさんとサイド・オマールさんを紹介していました。

オマールさんについては、京都に取材して命日の集まりを紹介していました。オマールさんとそのことを掘り起こした慰霊のつどいについて、早川さんのお話を紹介していました。昨年９月の慰霊のつどいの場だと思いますが、平さん・守田さん・増田さんの姿が複数回しっかりと映っていました。

ＮＨＫの別の番組で、南方特別留学生の全容について４月末頃に放映していました。驚いたのは、彼ら留学生が戦後に帰国した国々で活躍し、今日のＡＳＥＡＮにつながっているとの解説でした。また、それは大日本帝国が掲げた「大東亜共栄圏」構想が、形を変えて実現したというように聞こえたのですが。歴史的には単純ではないので、一部ではそういう面もあるのかと思いますが、どう評価されるべきなのか課題でしょう。

この番組では被爆死した２人については触れられていませんでしたが、今回は２人に焦点をあててしっかりとした構成になっていました。時間的には１０分位ではなかったと思いますが、独立した番組でなくワールドニュースの一部の様な扱いだったように思います。新聞のテレビ番組表にも何も記載はなく、ワールドニュースを見ていてたまたまぶつかったような感じでした。

広島サミットとも関連して、テレビの各局で広島と原爆関係に関する番組が増えているように思います。

■ドキュメンタリー映画『放射線を浴びたＸ年後―第３弾』の完成と上映運動

平　信行（南区）

伊藤英朗監督のドキュメンタリー映画『放射線を浴びたＸ年後―第３弾』完成の報が届きました。タイトルは「Ｓｉｌｅｎｔ　Ｆａｌｌｏｕｔ」です。第１弾、第２弾は中部太平洋でのアメリカ核実験による日本のマグロ漁船と乗組員の被害がテーマでしたが、今度の第３弾はアメリカ本土のアメリカの人たちの核実験と核兵器製造による被害に焦点が当てられたものです。上映運動はアメリカでも積極的に行うよう計画が進められています。

映画作成費用は文化庁の補助金とクラウド・ファンティングによってまかなわれました。京都「被爆二世・三世の会」も二度に渡ってファンティングに協力しています。クラウド・ファンティング協力者には「リターン上映」と称して上映資材が無料で提供されます。「二世・三世の会」には無料の自主上映権が２枠あることになります。

京都の他の市民団体の人たちとも協力しあって、この夏、自主上映会を開催し、映画の普及運動、核被害の告発を拡大する運動をとりくんでいきたいと思います。

本・DVD・映画・番組・その他の紹介と交流

■武器としての国際人権―日本の貧困・報道・差別　　藤田早苗：著

紹介　石角敏明（長岡京市）

集英社新書
１０００円(＋税)

「国連」といえば「安保理事会」または「ユニセフ」とかいう組織名は浮かぶ人が多いと思いますが「特別報告者」といわれて、どれだけの人が「役割・任務」を理解しているのだろう。そして「日本の人権」が世界と比べて如何に「遅れて」いるのかわかる本です。「遅れている」といってもここまで「酷い」とは。現実を知ることは必要だといわれるが、知れば知るほど恐ろしくなってきます。

また政府の都合の悪い「特別報告者」の訪日には、徹底的に反対する。在日中の調査活動については、「接触者」も含めて徹底的に調査をする。スパイ行為に近いのではないか。確かに日本も「人権」に関する国際規約の八つの七つを批准している、これを見れば、日本も人権先進国になるはずだが、実際は「後進国」といってもよい人権状況である。一つ一つの事例はこの本を読んで理解・知ってほしいと思います。

日本が「なぜ」このような人権後進国になっているのか、その原因についても解明されているし、今後どうすべきかを、外国の取り組み、特にイギリスを紹介し改善すべき方向を示している。

これから「守田さん」の活動報告の中で触れられるであろう国連「特別報告者」，その立場・役割を前もって理解しておくとより理解が進むと思います。

Scrap book

■「京都も原爆投下の候補だった」長崎の被爆２世、中学生に核の脅威訴え

京都府南丹市園部町の園部中で、長崎市の被爆２世の女性が講演した。ウクライナを侵攻するロシアのプーチン大統領が核兵器の使用をちらつかせる状況を踏まえ「核兵器の脅威を取り除くには廃絶しかない。核兵器は人類を滅ぼす」と訴えた。

長崎原爆被災者協議会の柿田富美枝さん（６９）が２１日に講演。５月に修学旅行で長崎市の平和公園に足を運ぶのを前に理解を深めようと３年生１００人が聞いた。柿田さんは、京都市下京区の梅小路機関車庫が空から目印にしやすかったとし、京都も原爆投下先の有力候補だったと指摘した。１９４５年８月９日に長崎に落とされた原爆については「雲の切れ間から見える市北部に投下された。晴れていて投下先が違えば、母は死に、私も生まれていない」と述べた。ウクライナ侵攻に言及して「核を戦争の抑止力とする考えは危険。皆さんには知恵を出し、話して解決する力がある。核や戦争のない社会をつくってほしい」と願った。講演の後、生徒（１４）は「自分事として考えていないところが変わった」と話した。園部中の生徒は修学旅行で、ウクライナの平和を祈って昨年育てたヒマワリの種を柿田さんと一緒に平和公園の近くに植える。

（２０２３年４月２７日　京都新聞）

核兵器の恐ろしさを伝える柿田さんの話を聞く生徒たち(南丹市園部町・園部中)

編集後記

▼久方ぶりに新入会員の自己紹介記事を掲載することができました。伴沙羽子さん(被爆三世)、よろしくお願いします。▼年次総会での竹峰先生の記念講演、宮本ゆきさん翻訳の出版紹介、国連人権理事会報告と、この６月号のため特に意図したわけではなく偶然だったのですが、「グローバル・ヒバクシャ」という概念でテーマが一致しました。Ｇ７広島サミット「広島ビジョン」のあまりにも酷い宣言を見るにつけ、ますます私たちの運動を頑張らなければ、と思います。▼６月の京都は平和行進の月でもあります。６月２１日を皮切りに７月４日までの２週間、府下全域を歩きます。会員のみなさんも是非、一歩でも二歩でもご一緒に。(平)

２０２３年６月（水無月）行事カレンダー

月	日	曜	行　　事
６	１	木	大飯原発差し止め訴訟(京都)第３７回期日(14 時３０分・京都地裁)
	２	金	キンカン行動
	３	土	
	４	日	
	５	月	世界環境デー
	６	火	６・９行動 原発賠償京都訴訟控訴審第１８回期日(14 時３０分・大坂高裁)
	７	水	
	８	木	
	９	金	６・９行動 キンカン行動
	１０	土	大飯原発差し止め訴訟(京都)原告団総会(13 時１５分・ハートピア京都)
	１１	日	入梅
	１２	月	
	１３	火	
	１４	水	
	１５	木	京都「被爆二世・三世の会」６月例会(18 時３０分・ラボール京都)
	１６	金	キンカン行動
	１７	土	
	１８	日	父の日
	１９	月	戦争法（安保法制）廃止をめざす 19 日行動（18 時 30 分・市役所前）
	２０	火	夏至
	２１	水	２０２３年国民平和大行進京都入り(12 時３０分・山科ラクト公園) 通常国会会期末
	２２	木	平和行進(向日市・長岡京市・大山崎町・八幡市)
	２３	金	平和行進(宇治市・城陽市、久御山町、和束町・笠置町・南山城村) 沖縄慰霊の日　キンカン行動
	２４	土	平和行進(京田辺市・宇治田原町・井手町)
	２５	日	京都母親大会(14 時・教育文化センター)
	２６	月	平和行進(精華町・木津川市)　→　奈良県に引き継ぎ
	２７	火	平和行進(綾部市・旧大江町・旧夜久野町)
	２８	水	平和行進(福知山市・旧三和町)
	２９	木	平和行進(京丹波町・旧美山町)
	３０	金	平和行進(南丹市) キンカン行動